

幼児における体験のつながりと思考・表現のプロセスについての考察

1 幼児期の認知・思考の発達の特徴

ピアジェ (J.Piaget 1968) の乳児期～幼児期の認知発達の研究によると、幼児期の子どもの認知・思考の発達の特徴として以下のことが示されています。

2歳～4歳 「象徴的思考期」

○感覚運動的な経験やイメージをもとに予想したり考えたりする。

○身近な人物やその行動や言葉、物やできごとをイメージとして記憶し、それを心像や表象として再生することによって思考したり行動したりすることができる。

4歳～7歳 「直観的思考期」

○概念が発達し、物事を分類したり関連づけたりして考えることができるようになる。

知的な発達は、質的に異なる段階を経て進む。したがって、幼児期と児童期では、子どもの思考や学び方が異なっている。(参考・引用文献：「発達の論理を築く」村井潤一編 発達 ミネルヴァ書房)

以上の研究から、幼児期は体験や記憶によるイメージをもとにして考え、ものやことを理解していくと考えられます。このことについて、以下の記録をもとにして具体的に考察してみます。

2 「学級で共有する話し合い」の場面の記録から

7月15日、年長児ほし組

子ども 「今日ね、築山滑り台が大成功した！！」

教師 「ねー、今日はほんとに大成功だったが。今までと違ったんだよねー」

子どもA 「つるつるだった」 B 「スケート場みたいになったよ！」

教師 「ずーっと前から滑りたいと思ってたのが、やっと今日滑れたんだよね。先生もすっごく嬉しかったあ。けど・・・どうして今日は大成功したんだろう？」

子どもC 「先生、雨が降った後だったけんだよ。」 D 「雨の後はぬれちよるがあ」

教師 「ほんと、確かにぬれちよった。でも・・・それだけで今日は大成功したんだーかあ？」

子ども 少し考える。(記録中略)

子どもE 「あんねー、草だよ」「草はつるつるしてるんだよ。だから滑るんだよ」

教師 「なるほどー。草はどんな風になっちゃった？」

子どもF 「あ・・・こんな風になってた！」(自分の腕を使って、地面に倒れていた様子を表わす)

(記録中略-教師は、子どもが表現する言葉を紙に書いたり、身体による表現を真似したりして表す。)

教師 「なるほどお！・・・草がないと？」

子ども 「ざらざらして滑らない！！」

子ども 「あ！分かった！」「そういうことかあ～」「だけん滑れたんだー」

子どもたちは、なぜ滑ることができたのか、その理由が分かり、とてもすがすがしい表情であった。

(提供：島根大学附属幼稚園 教諭 芦村こころ)

3 「あ！分かった。そういうことかあ」—子どもの納得と理解を生み出したもの

この記録は、6月中旬以降子どもたちが「築山で滑りたい」という願いを約1カ月の間持ち続け、あれこれと試行錯誤しながら実現しようとしてようやく成功し、「成功したわけ」を共に考え話し合った記録です。試行錯誤した遊びの過程での、一つ一つの体験が、話し合いの時間と「場」の中で共有する思考の課題(なぜ滑れたのか?)の中でつながり、教師の発言(働きかけ)と子どもの発言が相互に作用し合う中で「滑れたわけ」=「築山が滑れるようになる条件」を見つけ出しています。一人一人が体験をもとにして考えたことを、他者に向かって伝えようとする「言葉」と「発言」や「身体で表現する」行為は、子どもにとって他者とコミュニケーションをとりながら自分の考えを確かにするための創造的な表現であり、新しい捉え方や考え方を生み出す能力につながるものです。また、友だちと共有してきた体験のプロセスは、新しい遊びを創造するプロセスにつながります。

幼児期には、試行錯誤を含めたたくさんの体験が関連づけられ、思考と表現によって整理されたときにこそ、はじめて本当の納得と理解(学び)が生まれてくるといえることができます。

(共同研究者：島根大学教育学部人間生活環境教育講座 野津 道代)